

キリスト教葬儀の流れ

	段階	本人および家族・近親者など	葬儀社・関連事業者	教会・司祭/牧師(*1)
健康時	健康時	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 他者の葬儀への参加など、体験を踏まえて葬儀を意識していく ◆ 必要に応じて遺言の作成や資産の整理などを行う(エンディングノートなどを活用するのもよい) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 葬儀や関連事項についての情報の提供などを行う ◆ 要請に応じて遺言作成に関する士業を斡旋する ◆ 要請に応じて事前相談・見積などを行う 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ もしもの時のために的確に備えるよう日常的に信徒に啓発する ◆ 信徒の信仰歴、本人の好きな聖句や聖歌・賛美歌などの情報を取りまとめる
終末期 → 臨終	老衰あるいは病状の深刻化または事故による受傷など	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 本人が会いたがっている人に連絡する ◆ 本人が心残りのある事柄を解決する ◆ 葬儀について教会や司祭/牧師へ相談する ◆ 可能であれば本人に葬儀に関する希望を確認する ◆ 必要に応じて葬儀社の選択、事前相談・見積の要請などを行う ◆ 遺影用の写真を準備する ◆ 本人の好きな聖句や聖歌・賛美歌、本人の略歴などを確認する 		<ul style="list-style-type: none"> ◆ 状況に応じて病床訪問、病者の塗油、聖体拝領/聖餐式などを行う ◆ 教会への受入体制を確認し、役員などへ連絡する(役員会などに諮る必要のある案件である場合は早めに行っておく) ◆ 家族と臨終時の連絡手順を確認し緊急連絡先などを交換する ◆ 家族が葬儀社を選択しているか確認し、必要ならば斡旋先を確認する ◆ 本人の信仰歴などを確認する
	危篤～臨終	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 家族・近親者などに状況を連絡する ◆ 教会・司祭/牧師へ状況を連絡する ◆ 死亡後の移送先を決め、安置のための布団などを準備しておく ◆ 付き添いや連絡の担当を決め、順繰りに休みながらその時に備える 		<ul style="list-style-type: none"> ◆ 状況に応じて臨終の祈り・枕頭の祈り(枕辺の祈り)などを行う(病院で行う場合も、自宅や教会などに搬送・安置後に行う場合もある) ◆ 要請に応じて家族に葬儀社を斡旋する ◆ 教会に直接搬送し安置する場合は受け入れの準備をする
臨終 → 死亡 → 葬	臨終～死亡直後(*2)	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 医師の死亡診断を受け、死亡診断書を受け取る(状況が特殊な場合には医師の指示に従う) ◆ 病院などの場合には看護師による遺体の死後処置を受けることもある 		
	遺体の搬送・安置・	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 搬送先・安置場所を決めて準備す 		

儀 々 拾 骨	保全処置	<p>る(布団などが用意できない場合は教会や葬儀社の備品を借りることができないか相談する)</p> <p>◆病院に出発可能時間を確認の後、出発希望時間を決めて葬儀社に連絡する(教会・司祭/牧師または病院などに葬儀社ないし搬送業者の斡旋を依頼することも考えられる)(*3)</p>	◆必要に応じてドライアイスなどによる遺体保全処置や美容処置などを行う	
	喪主などを決める	◆喪主・施主・遺族代表など主要な役割を誰が担うか決める		
	葬儀の形式・公開範囲・式場・日程など大枠を決める	<p>◆弔辞など、主に時間配分に影響する葬儀の内容についての希望があれば司祭/牧師と葬儀社に伝える</p>	◆遺族や司祭/牧師から情報を収集し、参列者の人数規模および開式から出棺までの時間を予測する	◆式順や説教の時間などを想定し、葬儀にかかる時間を葬儀社に伝える
<p>◆遺族(喪主はじめ主要な人々)・司祭/牧師(教会役員などを含む場合も)・葬儀社の三者で、葬儀の形式・公開範囲・日程・式場など大枠を決める (三者の都合だけでなく火葬場や主要参列者の都合なども判断の材料となる場合がある)</p>				
	関係者への連絡	<p>◆香典(御花料)や供花の取り扱い(受けるか辞退するかなど)を決めておく(*4)</p> <p>◆決まった日程や内容を家族・近親者・主要参列者などに連絡する(伝達の漏れや間違いを防ぐため、電話だけでなくFAXやメールなどを活用するとよい)</p> <p>◆弔辞を述べてもらいたい場合はその相手に依頼する</p>	◆火葬場の予約など必要な手配を行う	<p>◆葬儀が信徒に公開されている場合は日程を連絡網で回す</p> <p>◆教会のスケジュールで中止・変更する必要のあるものは連絡する</p> <p>◆役員や信徒に連絡し、必要な奉仕者を確保する(司会者・奏楽者・受付の手伝い・献花の手伝い・式次第の印刷業者など)</p>
	葬儀の具体的な内容や料金などを打ち合わせる	<p>◆棺などの物品を選択する</p> <p>◆生花飾りの規模や内容を決める</p> <p>◆遺影を作る場合は原稿と加工処理内容を決める</p> <p>◆会葬御礼品・御礼状・献花・式次第などを用意する場合は品物や数量を決める</p> <p>◆タクシーやバスなどが必要な場合は台数や行程を決める</p>		<p>◆故人の略歴などを遺族から聴き取る</p> <p>◆故人の好きな聖句や聖歌・賛美歌などを参照しながら、葬儀で用いる聖句や聖歌・賛美歌などについての遺族の希望を確認する</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ◆料理などが必要な場合は規模や内容を決める ◆役務提供の範囲を確認する(葬儀の運営のほか、死亡届の提出代行など必要な事柄についても確認する) ◆注文や内容の変更などに締切がある場合は時間や連絡先を確認しておく ◆見積書を交わし、内容や金額をよく確認する(概算総額については必ず確認し、さらに料金の変動する可能性のある事項について理解を合わせておく) <p style="text-align: right;">など</p>		
	◆その他、分からないことがあればその都度忌憚なく司祭/牧師や葬儀社に説明を求める		
葬儀の準備	<ul style="list-style-type: none"> ◆式服や靴などを用意しておく ◆食事や水を十分に採り、時間を見つけて身体を休めておく 	<ul style="list-style-type: none"> ◆式場を設営する ◆供花を葬儀社が用意する場合は申込に対応する 	<ul style="list-style-type: none"> ◆葬儀説教などを考える ◆必要に応じて式次第(印刷物)などを作成する(司祭/牧師が内容を指示し葬儀社が印刷する場合もある)
	◆死亡届を役所に提出し、火葬許可を受ける		
	◆式の進行や必要な作業、また設営にかかる教会内での注意事項などについて十分に打ち合わせておく		
納棺(納棺式)	<ul style="list-style-type: none"> ◆差し支えがなければ主に家族・近親者の手によって納棺する ◆棺と一緒に入れたい物(副葬品)を用意する(実際に入れていい物かどうかは葬儀社に確認する) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆棺を用意する ◆納棺式がある場合は司祭/牧師に納棺のタイミングを確認する ◆遺体の抱え方などを遺族らに指導しながら納棺を補助する 	◆状況に応じて納棺式を行う
遺体・棺の搬送		◆納棺前あるいは納棺後などに遺体を搬送する必要がある場合は搬送する	◆自宅から式場へ棺を移動する場合などに出棺式を行うこともある
通夜/前夜式～葬儀/告別式(*5)	<ul style="list-style-type: none"> ◆通常、遺族親族席が設けられているのでそこに座る ◆状況に応じて代表挨拶や立礼などを行う ◆香典を受け取る場合には、親族や信頼できる友人などから取り扱い担 	<ul style="list-style-type: none"> ◆特に遺族に対して聖体拝領、献花や焼香、立礼などの方法・留意点を説明する ◆受付を補助したり参列者を席へ案内するなど必要な業務を行う ◆必要に応じてマイク出しや献花の 	<ul style="list-style-type: none"> ◆通夜/前夜式、葬儀/告別式を執り行う(*6) ◆信徒が受付や献花などを手伝うことも多い ◆式中に教会の電話が鳴った場合などに備えて係を決めておくとい

		当者を決めて受付に着かせる	誘導などの補助業務を行う(弔電披露などの役を担う場合もある)
	出棺～火葬前の祈り (*7)(*8)	◆差し支えがなければ主に家族・近親者の手によって棺を霊柩車に載せる(予め棺や遺影を持つ人、霊柩車に同乗する人などを決めておくとい)	◆棺の持ち方などを遺族らに指導しながら霊柩車への積載を補助する ◆霊柩車で棺を火葬場まで搬送する ◆火葬場での案内や事務手続を行う
	火葬～拾骨(*7)(*8)	◆火葬の終了まで適宜待機する(地域性や火葬場の事情にもよるが、待ち時間に食事を行うことも少なくない)(近年少なくなったが、拾骨が翌日に行われるケースもある) ◆時間が来たら火葬場職員や葬儀社の指導に沿って拾骨する ◆遺骨と死体火葬許可証(火葬証明書)を持ち帰る	◆収骨容器を用意する(遺族が火葬場で購入する場合は指導する) ◆拾骨指導を火葬場職員が行わない火葬場では、遺族に拾骨の方法を指導する
	遺骨を安置する	◆遺骨を自宅などに安置する際の規則は特にない。落ち着いた場所に遺骨・遺影・生花などを並べて置くことが多い。カトリックで家庭祭壇がある場合には、その周辺の棚などに置かれることもある。	
その後	御礼回り	◆葬儀に際して協力してくれた人たちに適宜御礼に伺うとい(教会も改めて訪問し、その際に献金や謝礼などを納めることが多い)	
	死後事務手続	◆葬儀料金を精算し、支払を行う(見積書との相違点などについては支払前によく確認する)	
		◆届出・相続など各種死後事務を行う(自分たちで行うことが困難な場合は専門家に依頼する)	◆遺族に死後事務手続の概要を説明する ◆要請に応じて死後事務に関わる士業を斡旋する
	香典などの返礼	◆必要に応じて香典などの返礼を行	◆要請に応じて返礼品や御礼状など

	う(地域の習慣などによっては葬儀当日にその場で返礼が行われることもあるが、後日行う場合は死後50日前後を目安とすることが多い)	の販売・作成・ギフト業者の斡旋などを行う	
追悼の式・記念会 (単独で行われる場合のみではなく、納骨を伴うことや、納骨の後に行われることもある)	<ul style="list-style-type: none"> ◆時期と参加者の範囲を決める ◆追悼の式を行う場合は司祭/牧師と日程などを打ち合わせる ◆必要に応じて葬儀社などに会場準備などを依頼する ◆会食を伴う場合は予約などを行う 	<ul style="list-style-type: none"> ◆要請に応じて会場に生花飾りや受付などを準備する ◆要請に応じて料理店・仕出し業者などを斡旋する 	◆要請に応じて追悼の式を行う(教会を式場・会場として提供する場合はその準備も行う)
墓地などの準備	<ul style="list-style-type: none"> ◆墓地などの使用权を得る ◆必要に応じて墳墓を造成する 	◆要請に応じて墓地を紹介したり墓石業者などを斡旋する	◆必要に応じて教会墓地や納骨堂などの使用について相談を受ける
納骨(納骨式)(*9)	<ul style="list-style-type: none"> ◆納骨に司祭/牧師の立ち会いを希望する場合は日程を打ち合わせる ◆墓地や納骨堂の管理事務所に納骨日時を連絡し、事務手続を確認する(手続には死体火葬許可証ないし分骨証明書が必要) ◆遺骨を墓地や納骨堂に運ぶ 	◆要請に応じて墓石業者などを斡旋する(カロートの入口が漆喰で固められている場合など)	<ul style="list-style-type: none"> ◆教会が経営する墓地や納骨堂に納骨する場合には火葬許可証の提出を受ける ◆要請に応じて納骨の式などを行う

(*1) 宗教者の呼び方は教派や教会によって違いがあります。カトリックでは「神父(総称)」「司祭(祭儀を司る役職)」など、プロテスタントでは「牧師」「伝道師」など、また教派を問わず葬儀を主に執り行う人を「司式者」などと呼ぶこともあります。口頭で呼びかける場合には、カトリックや正教会では「神父様」、プロテスタントや聖公会では「先生」と呼ぶことが一般的です。どのように呼べばよいか迷う場合は、宗教者や教会の人に確認しましょう。

(*2) 現在多数である病院などでの死亡を想定して記述しています。事件・事故など特殊な状況においてはこの限りではありません。

(*3) 式場の受け入れの都合などによりどうしても直ちに帰り先が決まらない場合、病院によってはしばらくの間霊安室などで遺体を預かってくれる場合もあります。また葬儀社によっては遺体の安置施設を持っており一旦そちらに預けることができる場合もあります。しかしどちらも利用可能か確実ではなく、また費用もかかる場合がありますので、状況に応じて関係各位とよく相談する必要があります。

(*4) キリスト教では死者に供物を捧げるという観念がない(むしろ忌避される)ため、教会や司祭/牧師によっては供花などを受けることを禁止される場合もあります。また日本のキリスト教会では供花そのものに名札を掲示することはほとんどありません(ただし海外ではそうでもないようです)ので、掲示の必要がある場合には、式場外(受付周辺など)に一覧で掲示するなどの方法がとられることもあります。

(*5) 通夜/前夜式、葬儀/告別式の名称は教派や教会によってさまざまです。お知らせなどに表記する場合はそれぞれに確認する必要があります。(付録Ⅳ参照)

(*6) 宗教儀礼を伴う葬儀とそうでない告別式というように切り分けている場合は、告別式については司祭/牧師が進行する場合も葬儀社が進行する場合もあります。

(*7) 現在の日本の事情に鑑み、火葬についてのみ記述しています。土葬の場合は適宜読み替えたり省略してください。

(*8) いわゆる骨葬地域においては、火葬は葬儀/告別式の前に行われます。またその他の地域でも事情によりこの順序が前後することがあります。

(*9) 納骨の時期については法的にもキリスト教的にも決まりはなく、遺族が納骨してもよいと思った時期に行って差し支えありません。教会墓地に納骨する場合は、イースターや信徒聖日などに墓前礼拝を行う際に、同時に納骨されることも多くあります。時期に迷う場合は司祭/牧師に相談したり、地域の一般的な慣習などを参考にしましょう。

(付録Ⅰ) 表中で使われている用語の解説

◆ 教会

キリスト教徒の集まりのこと、また礼拝のための建物のこと。

◆ 聖句、聖歌・賛美歌

「聖句」とは聖書に書かれた文章の一部分のこと。「聖歌・賛美歌」とはキリスト教の礼拝に際して神を賛美するために歌う歌のこと。一般的にカトリックでは聖歌、プロテスタントでは賛美歌(讃美歌)という。

◆ 喪主・施主・遺族代表

一般的に「喪主」とは葬儀を主宰し祭祀を承継する人、「施主」とは葬儀を施行し費用を負担する人、「遺族代表」とは遺族を代表し対外的な手続や挨拶などを行う人のことを言う。1人で全ての役割を担うことが比較的多いが、分担することもある。なお教会や司祭/牧師によっては「祭祀」という観念がキリスト教的でないとして、特に「喪主」という語を嫌う場合もある。

◆ エンディングノート

自分自身の死と葬儀に際して、遺される人々に伝えたい事柄を(通常は本人が)記す帳面。遺される人へのメッセージだけでなく、葬儀の内容などに関する希望や、相続に関係するメモなどを含む。遺書に対し、内容が幅広く呼称が堅苦しくないなどの理由から、比較的気軽に書くことができるものとして近年関心を集めている。書店などでも多様な体裁のものが販売されているが、専用のもを用いず単なるノートに必要事項だけを書く人もいる。

◆ 遺言

自分自身の死後、遺る財産などの処分について、遺される人々への指示。その内容自体のことも、それを書き記した書面(遺言書)のことも言う。一般に「ゆいごん」と言うが、法律語としては「いごん」と言う。方法や有効な内容などが法律で定まっており、遺書等とは意義や有効性が異なる。

◆ 士業

弁護士・司法書士・行政書士・税理士など、「～士」と付く職業の総称(俗称)。士業全体は幅広いが、相続事務は一般的に(係争が起こるようなことがなければ)上記のうち弁護士を除く3つの士業でそのほとんどを行うことができる。

◆ 骨葬

遺体ではなく遺骨を置いて行われる葬儀。「通夜/前夜式→葬儀/告別式→火葬」ではなく「通夜/前夜式→火葬→葬儀/告別式」といった順で行われる。地域によっては骨葬が一般的な場合がある。

◆ 死亡届

役所に死亡を届け出る書類。届け出る際は死亡診断書(死体検案書)を添付する必要がある。死亡を届け出る期限は法律上「死亡の事実を知った日から7日以内」と定められているが、死亡を届け出なければ火葬の許可が受けられないため、実際には火葬よりも前に届け出ておく必要がある。また届け出ることのできる役所は、「死亡地」「死亡者の本籍地」「届出人の住所地」のいずれかの役所である。なお死亡届の記入は特別な事情(文字が書けないなど)がない限り届出人(主に遺族)が行うが、役所への提出は葬儀社が代行することも多い。

(付録Ⅱ)キリスト教葬儀についてよくある質問

Q. 参列する時の服装はどうすればいいですか？また何か必要な物はありますか？

A. キリスト教の葬儀に参列する場合の特別な服装というものはありません。その他の葬儀に参列する時のものと同じように考えてください。時間などの都合で服装の準備が間に合わない場合には、平服で参列することもあります。また参列に際して必要な物も特にありません。葬儀で用いられる聖句や聖歌/賛美歌などは式次第などに印刷されていることが多く、そうでない場合にも必要に応じて貸し出されるでしょう。ロザリオや十字架などのアイテムも、キリスト教徒でない人が持つ必要はない物です。

Q. 数珠はいらないんですよね？

A. 数珠(念珠)は仏教のアイテムですから、キリスト教葬儀では不要です。しかしあなたが仏教徒である場合には、ご自身の信仰に照らして数珠を手放せない場合もあるでしょう。そのような場合には式場までお持ちになることは差し支えありませんが、クリスチャンのご遺族や他の参列者の心情を徒に傷つけることがないように、できれば鞆やポケットに忍ばせたまま取り扱っていただくほうがよいでしょう。

Q. 献花に作法はありますか？

A. 献花(教会によっては飾花とも)の方法についての決まりは特にありません。神道の玉串奉奠のように儀式めいて回す必要もありません。花の向きは手前にする人が多いですが、葬儀の事情による場合もあるので、前の人に倣うものと理解していただくのがよいでしょう。また献花の前後に棺や遺影に一礼するなどの必要もありません。なおカトリックの葬儀では献花の代わりに焼香を行う場合もありますが、この際にも仏教各宗の焼香作法のような規則はありません。回数も1回で十分でしょう。

Q. 教会に駐車場はありますか？

A. 日本のキリスト教会はごく一部を除き、あまり広い敷地を持っていないことが普通です。葬儀が教会の建物で行われる場合、一般参列者のための駐車場は基本的に無いと思っていただいたほうがよいでしょう。駐車場があってもせいぜいご遺族の分ぐらいだけということが多いため、自動車で来る必要がある場合には予め近隣のコインパーキングなどを調べておいてください。

Q. 急いでいるんですが、献花(焼香)だけして帰れますか？

A. 基本的にはそれはできません。仏教葬儀では読経中であっても一般参列者の焼香を進めるケースも散見されますが、キリスト教葬儀では礼拝の時間と告別の時間ははっきりと切り分けられていることが普通です。可能な限り葬儀の開始から終了までご参加ください。

Q. 通夜/前夜式に間に合わないのですが、教会は一晩中開いていますか？

A. キリスト教葬儀では夜通しご遺体を守るという習慣は基本的にはありません。また教会の建物も宿泊を前提には造られていないため、ご遺族は通夜/前夜式が終われば翌日に備えて自宅などで休むことが一般的です。そのため教会の建物は夜間には無人となり施錠されていることが多いので、可能な限り通夜/前夜式の時間に合わせてご参列ください。

Q. 香典袋の表書きはどうすればいいでしょう？

A. 教派を問わず「御花料」などと書くのが無難でしょう。マナー本などでは「カトリックでは御ミサ料」などと紹介されていることも多いのですが、香典の性質から考えると不自然です。なお香典は日本社会の習慣で宗教とは特段の関わりがありませんし、表書きなどは単なる形式上のことです。ですから、普通に「香典」などと書いても大きな問題ではありません。また近頃では「御花料専用封筒」なども販売されていますが、それに拘る必要もありません。

(付録Ⅲ) 教派による式名称の違い(教会や司祭/牧師の考え、また葬儀の事情にもよるため、必ずしもこの通りとは限らない)

宗派	前日(夜)	当日(昼)
カトリック	通夜	葬儀 葬儀ミサ (信徒でない場合「ことばの祭儀」)
聖公会	通夜の式 通夜の祈り	葬送式
プロテスタント諸派	前夜式 告別前夜式 前夜祈祷会 棺前祈祷会	葬儀 葬儀式 告別式 葬儀告別式 葬送式 葬式 葬送礼拝
正教会	通夜 (パニヒダ)	埋葬式

キリスト教葬儀を施行する葬儀社の皆さまへ

現在の日本では、キリスト教の主だった教派の構成員を全て合わせても人口の1%に届きません。そのためキリスト教葬儀が施行される割合もそれに比例して少なく、特に一般葬儀社がキリスト教葬儀を施行する機会は滅多にないといえます。キリスト教会の比較的多い都市部にはキリスト教専門葬儀社が存在する場合がありますが、地方部では市場規模から事実上経営が成り立たないなどの理由により専門葬儀社はほとんどありません。地域の一般の葬儀社の協力を得てキリスト教会は葬儀を行っています。葬儀社側としても実務に当たっては戸惑いも多いようです。

最もよく聞かれるのは「キリスト教葬儀は施行した経験が少ないから、よく分からず不安だ」というものです。キリスト教葬儀は日本で多数を占める仏教葬儀などに比べ、その考え方などさまざまな点で確かに違いがあります。しかしこの資料の表で分かるように、キリスト教葬儀に際して葬儀社が行うべき業務は、他宗教の葬儀におけるそれと大きく変わるものではありません。施行に当たる実務者がキリスト教葬儀に対し深い理解があるならばそれに越したことはありませんが、第一義には葬儀社はその他の実務者に代え難い独自の職能を十分に発揮すればそれでよいのです。これは他宗教の葬儀においても注意すべきことですが、葬儀社はそれ単独で葬儀すべてをコントロールするのではなく、宗教など専門的な部分についてはその専門家と役割を分担し、互いに補完し合って葬儀を実施していくことが求められています。ですからキリスト教葬儀の経験が少ないからといって殊更に不安がる必要はなく、不明な点は司祭/牧師とよく擦り合わせ、互いに信頼をもって連携していくことこそが必要です。

また「キリスト教葬儀に使う専門の用具や消耗品を持っていない」という声も聞かれます。しかしキリスト教の葬儀は大筋で日常的なキリスト教の礼拝の形式を取りますから、宗教的に最低限必要な用具はもともと教会に揃っています。ですから葬儀社は一般的な葬儀を施行するに十分な用具を持っていさえすれば、キリスト教葬儀も施行することができます。棺や骨壺なども「キリスト教専用」と銘打っている物はありますが、必ずしもキリスト教葬儀でそれらを用いなければならないということはありません。時折、棺などにも十字架をあしらっていただければならないと考えてわざわざシールなどを貼っていることも見かけますが無用な配慮で、体裁が気になるようなら多少上等な無地の布でも掛けておけばよいことです。

「式場の飾りの様態が想像できない」という声もあります。しかしこれも悩む必要はありません。キリスト教葬儀においていわゆる祭壇や生花の飾りは主役ではなくあくまでも礼拝の添え物です。遺族や教会から希望があるならそれに従い、希望があまり出ないなら式場の動線などに配慮しつつ空間の雰囲気を変えない程度にスタンド生花などを並べておけばよいでしょう。小さな式場であれば、かご花や花束を棺の周りに適宜並べるだけでもよいぐらいです。なお傾向としては洋花や淡い色合いが好まれ、またあまり作り込んだデザインではなく自然なアレンジが好まれるでしょう。

日本のキリスト教会は現在もこれからも皆さまの適切な協力を必要としています。私たちの信仰共同体の大切な営みを支えてください。